雑学 鳥獣植物戯詩

全24回

八木 幹夫

第7回【ふりむかぬ狐】

作家小沢信男さんが桃の節句（令和3年）に亡くなられた。詩人ばかりが集って辻征夫の詩集名に因んで余白句会と命名。詩人どもが俳句なんぞにうつつを抜かしてと揶揄するむきもあったが、意に介さず小沢さんを宗匠に真剣に遊んだ。文学活動は個人の作業というより、流れの中で産まれる共同作業だと教えられた。

たまたま、句会を終え、ラーメン店で湾岸戦争の夜間空爆を見ていた。発射される無数の火の砲弾。テレビを見上げ、「君たちアメリカ人はだね、ニンゲンをなんだと思ってるんだ。これじゃ、あの東京大空襲の時と同じじゃないか。雨霰の爆弾の下には人の生活があるんだよ。」矛先は当時句会に参加していた若き日のアーサー・ビナード。個人を責めたのではない。国家の横暴に対して小沢さんは身体を震わせて怒った。

「東京骨灰紀行」や「裸の大将一代記」は言わずもがなの名著。俳号の巷児（ちまたの子）らしく江戸っ子の辛辣な口調が歯切れ良い。熱い思いをいつもたぎらせて語ってくれた小沢先生、本当にお疲れ様でした。

ふりむいてもうふりむかぬ狐かな　巷児

公益社団法人 俳人協会